

古文：副詞の呼応・疑問・反語など

要点

自立語のうち、おもに用言を修飾するはたらきを持つのが副詞である。副詞はさらに三種類に分けられる。第一は、状態の副詞。動作や作用の様子をくわしく述べるために使われる。第二は、程度の副詞。物事の性質の度合い(強弱)を定めるために使われるもの。そして第三が、呼応(叙述)の副詞である。これは特定の言い回しとセットで用いられるという特徴を持っている。今回は呼応の副詞の中でも古文にしか見られない用法について紹介する。

また古文には、一見したところ普通の文のようなのに、じつは疑問文であるものが多い。それを見誤らないようにするために、疑問文型をしっかりとマスターしておこう。さらに、疑問文を挿入句として用いる文型も紹介する。文章中の挿入句を見分けることができれば、複雑な文脈もうまく把握できるようになるだろう。

副詞の呼応

1 完全否定

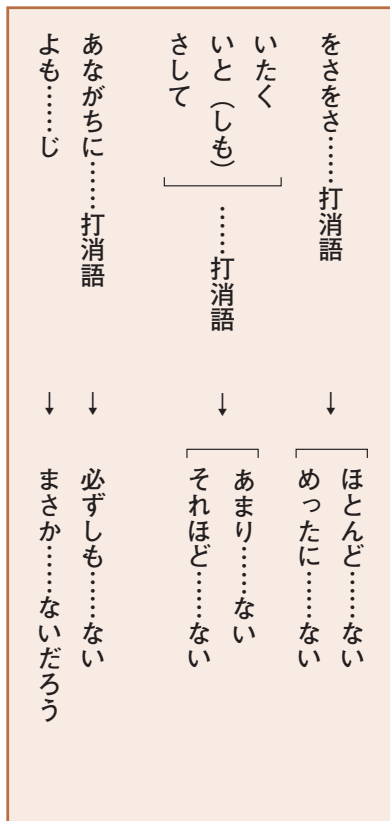
さらに
すべて
たえて
つやつや
つゆ
よに
あへて
おほかた
ゆめ・ゆめゆめ

……打消語↓

まったく……ない
けっして……ない
少しも……ない

「さらに」や「つゆ」が打消語と一緒に使われているときは、それを強調する働きがある。つまり、疑う余地のない完全な否定を表すのである。

2 いろいろな否定



「をさをさ」は、完全には打ち消せないという状況で使われる。百パーセントの否定を表す「つゆ」などの違いに気をつけよう。

【例文】冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。

冬枯れの景色は、秋(の景色)にはほとんど劣るまい。

『徒然草』

「いたく」は形容詞「いたし」の連用形が副詞化したもの。通例は〈はなはだしい・ひどい〉の意で用いられる言葉であり、打消語を伴うときは〈はなはだしくない〉すなわち〈そんなに目立たない〉という意味になる。これは英語の《not ~ very much》と同じ理屈である。

【例文】内のさまは、いたくすさまじからず。

家の中の様子は、それほど荒れていない。

『徒然草』

「あながちに」の本来の意味は〈ひたすら・無理やり〉である。これが打消語を伴うと、部分否定の構文になるのである。

【例文】あながちに勲功の賞とも覚えず。

必ずしも手柄のほうびとも思えない。

『保元物語』

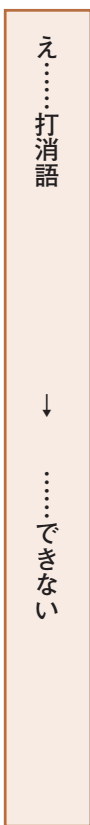
「よも」は打消推量「じ」と呼応することが多い。他の打消語が使われるケースはまれである。二語をひとまとめで覚えておくとうい。これは〈十中八九そんなことは起こらないだろう〉の意で予想を表す。

【例文】さりとも、よも子を捨てては逃げじ。

そうであっても、まさか子供を捨てては逃げないだろう。

『今昔物語集』

3 不可能



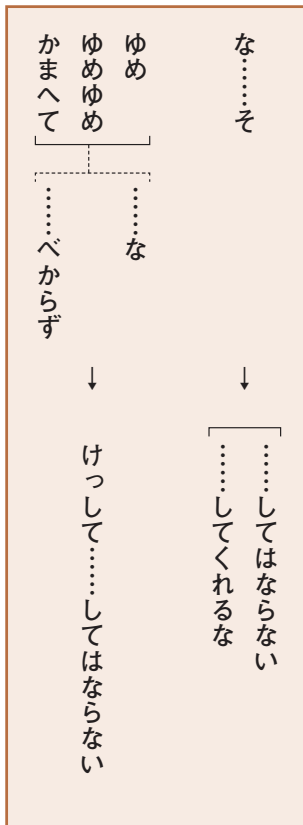
「え」は「得」という動詞の連用形が副詞化したもの。この動詞に可能の意味が含まれていることは、現代語における「理解し得ない」などの表現からうかがえるところである。実際の用例は「え……ず」というパターンが大半を占めるが、〈できないだろう・できそうにない〉の意となる「え……じ」「え……まじ」などもある。参考までに付け加えておくと、現代の関西方言の「よう言わん」という言い回しは、この構文に由来するという。

【例文】人のそしりをもえはばからせ給はず。

人々の非難も気兼ねすることがおできにならない。

『源氏物語』

4 禁止



「な……そ」という構文には、動詞の連用形（カ変・サ変なら未然形）が使われる。これは比較的程度の軽い禁止を表しているため、より命令の度合いを強めたいときは「ゆめ……な」「ゆめゆめ……べからず」などの表現が選ばれる。

【例文】 な起こし奉りそ。幼き人は、寝入り給ひにけり。

『宇治拾遺物語』

お起こし申し上げてはならない。幼い人は寝入ってしまった。

【例文】 ゆめこの雪落とすな。

『大和物語』

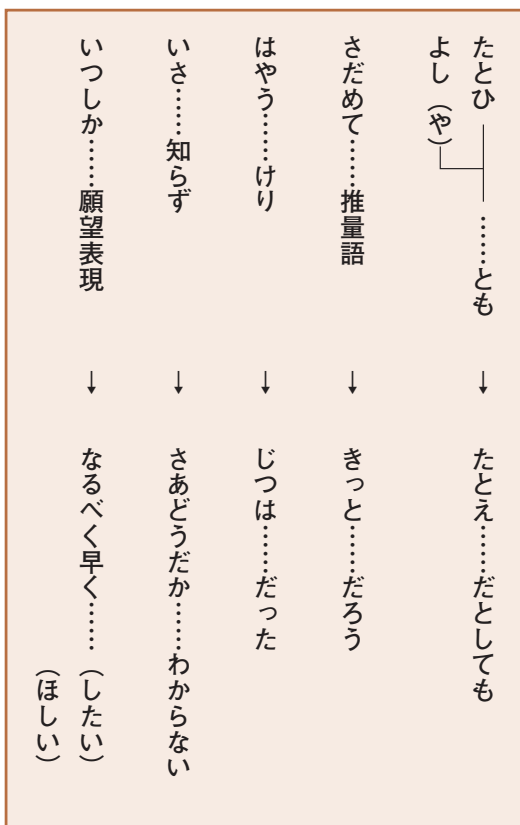
けっしてこの雪を落としてはならない。

【例文】 盗み心をゆめゆめ持つべからず。

『おらが春』

盗み心をけっして持つてはならない。

5 その他



「さだめて」といつしよに使われるのは、推量の意味を含む助動詞。例えば、「べし」「む」「じ」「らむ」など。

「はやう」は「早く」のウ音便形。もともとの語義は〈前から〉であるが、それに「けり」がつくことによって、〈いままで気づかなかつたけれど以前からそうだったのだ〉という意味になる。

「いつしか」は〈いつの間にか・知らないうちに〉の意で使われることが多いが、本来は〈いつの間になつたら……か?〉という意味を表していた。それが〈まだ実現しないのか、早く実現してほしい〉という待望の気持ちの意にすりかわったのである。

疑問・反語／省略・挿入

1 疑問(反語)の基本文型

① 終止形十や。

【例文】「御子はおはすや」と問ひしに、

「お子さんはいらっしゃいますか」と尋ねたところ、

『徒然草』

② 体言・連体形十か。

【例文】「子安の貝取りたるか」と問はせ給ふ。

「子安の貝を取ったか」とお尋ねになる。

『竹取物語』

③ や……連体形。／か……連体形。

【例文】「ほととぎすや聞き給へる」と問ひて、

「ほととぎすの声をお聞きになりましたか」と尋ねて、

『徒然草』

④ 疑問の副詞(十か)……連体形。

疑問の代名詞(十か)……連体形。

【例文】「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、

「どの山が天に近いか」とお尋ねになると、

『竹取物語』

2 反語の訳し方

……だろうか、いや……(はずが)ない。

反語とは、「……か?」と問いかけながら、「いや、そんなはずがない」という答えを言外に含んでいる表現のこと。単純な否定文よりも強い響きを持っている。口語訳にあたっては、通常の疑問文と区別するために、この否定部分を添えた自問自答の形が一般的とされる。

【例文】位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。

『徒然草』

地位が高く、身分が高い人を、すぐれた人というのだろうか、いや、そうではない。

参考

右の例文のように「やは」「かは」という語句が使われているときは、反語表現になっている場合がほとんどである。しかし、これらはまれに疑問を表すこともあるし、「は」を伴わず「や」「か」だけで反語表現になることもよくある。△やは「かは」があれば反語と機械的に覚えるのではなく、念のため前後の文章とのつながりを確認する習慣をつけよう。

3 疑問の副詞

いかが	(どのように・どうして)
いかに	(どうして)
いかに	(どのように・どうして)
いかばかり	(どれほど)
なぜ・なんぞ	(どうして・なぜ)
なぜ	(どうして・なぜ)
など	(どうして・なぜ)
なにゆゑ	(どうして・なぜ)
*なんでも	(どうして)

結びの語は連体形

*反語のみ

これらが連体形と呼応するのは、ちょうど係り結びの法則と同じである。実際、係助詞「か」を伴った「いかでか」「いかばかりか」「なか」という形で使われ、文字どおりの係り結びになることも多い。

【例文】「**なごいと久しう見えざりつる**」と問へば、 『枕草子』

「**どうして**随分長い間姿を見せなかつたのか」と尋ねると、

なお、「いかで」には「何とかして……したい」の用法もある。その場合は、願望や意志を表す「ばや」「まほし」「む」などと呼応する。

【例文】 **いかで**このかぐや姫を得てし**がな**。 『竹取物語』

何とかしてこのかぐや姫を手に入れたいものだ。

4 係り結びの結びの語の省略

にや。／にか。 ↓「ある・あらむ・侍る・侍らむ」が省略される
にこそ。 ↓「あれ・あらめ・侍れ・侍らめ」が省略される
とぞ。／となむ。 ↓「言ふ・聞く・思ふ」が省略される

【例文】 まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふ**にや**。 『徒然草』

↓文末に置かれるはずの「あらむ」が省略されている

確かにあったという気がするのは、私だけがこのように思う**のたろうか**。

【例文】 飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりける**とぞ**。 『徒然草』

↓文末に置かれるはずの「言ふ」が省略されている

飼っていた犬が、暗かったけれど飼主を見知って、飛びついたのだ**と**
うことだ。

5 挿入句

疑問の文型をとる句が読点(、)にはさまれていて、結びになるはずの語で文章が終わらない場合は、挿入句であることが多い。

、 …… や …… む、 —
、 …… や …… けむ、 —
、 …… や …… らむ、 —
、 …… か …… む、 —
、 …… か …… けむ、 —
、 …… か …… らむ、 —
、 …… にか、 —
、 …… 疑問語 …… 連体形、 —

挿入句とは、文章の途中に割り込んである句のこと。たいていは筆者が自分の感想を補ったものである。いったんこれを外して読めば、文脈を把握しやすくなるだろう。なお、右に示した公式は必ずしも常に当てはまるわけではないし、こういった疑問文型以外のものが文中に挿入されることもある。

【例文】薩摩守忠度は、いづくよりや帰られたりけむ、侍五騎、童一人、
我が身ともに七騎取つて返し、

薩摩守忠度は、どこからお戻りになったのだろうか、侍五騎と童一人に自分を加えて、七騎で引き返し、

『平家物語』

古文：副詞の呼応・疑問・反語など

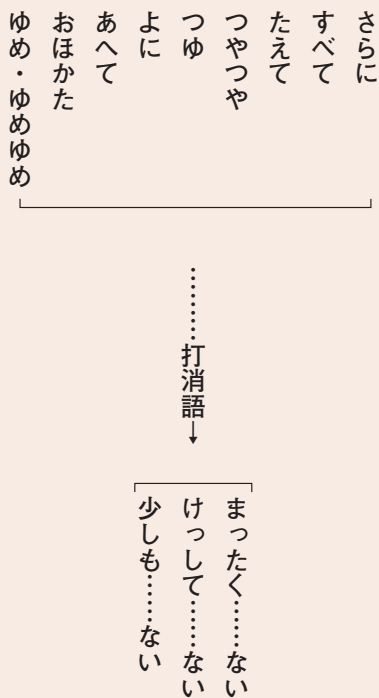
要点

自立語のうち、おもに用言を修飾するはたらきを持つのが副詞である。副詞はさらに三種類に分けられる。第一は、状態の副詞。動作や作用の様子をくわしく述べるために使われる。第二は、程度の副詞。物事の性質の度合い(強弱)を定めるために使われるもの。そして第三が、呼応(叙述)の副詞である。これは特定の言い回しとセットで用いられるという特徴を持っている。今回は呼応の副詞の中でも古文にしか見られない用法について紹介する。

また古文には、一見したところ普通の文のようなのに、じつは疑問文であるものが多い。それを見誤らないようにするために、疑問文型をしっかりとマスターしておこう。さらに、疑問文を挿入句として用いる文型も紹介する。文章中の挿入句を見分けることができれば、複雑な文脈もうまく把握できるようになるだろう。

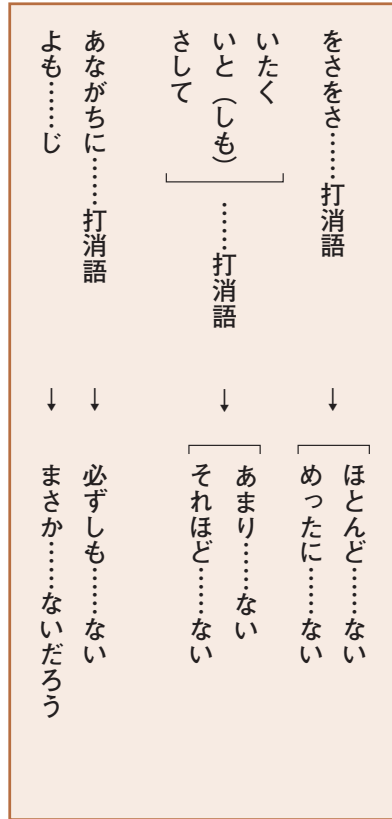
副詞の呼応

1 完全否定



「さらにも」や「つゆ」が打消語と一緒に使われているときは、それを強調する働きがある。つまり、疑う余地のない完全な否定を表すのである。

2 いろいろな否定



「をさをさ」は、完全には打ち消せないという状況で使われる。百パーセントの否定を表す「つゆ」などの違いに気をつけよう。

【例文】冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。

冬枯れの景色は、秋(の景色)にはほとんど劣るまい。

『徒然草』

「いたく」は形容詞「いたし」の連用形が副詞化したもの。通例は〈はなはだしい・ひどい〉の意で用いられる言葉であり、打消語を伴うときは〈はなはだしくない〉すなわち〈そんなに目立たない〉という意味になる。これは英語の《not ~ very much》と同じ理屈である。

【例文】内のさまは、いたくすさまじからず。

家の中の様子は、それほど荒れていない。

『徒然草』

「あながちに」の本来の意味は〈ひたすら・無理やり〉である。これが打消語を伴うと、部分否定の構文になるのである。

【例文】あながちに勲功の賞とも覚えず。

必ずしも手柄のほうびとも思えない。

『保元物語』

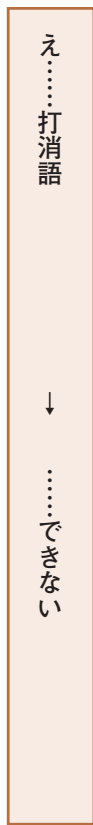
「よも」は打消推量「じ」と呼応することが多い。他の打消語が使われるケースはまれである。二語をひとまとめで覚えておくとうい。これは〈十中八九そんなことは起こらないだろう〉の意で予想を表す。

【例文】さりとも、よも子を捨てては逃げじ。

そうであっても、まさか子供を捨てては逃げないだろう。

『今昔物語集』

3 不可能



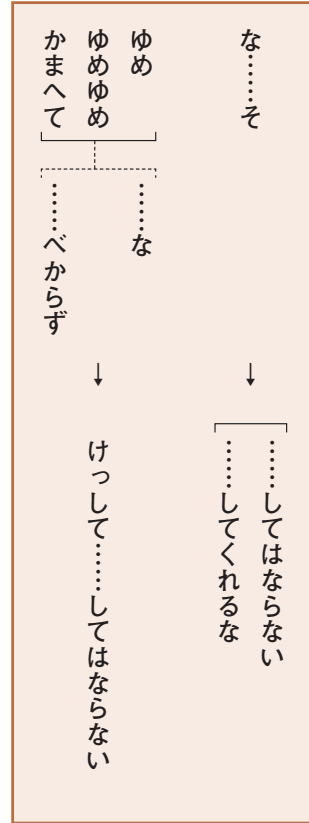
「え」は「得」という動詞の連用形が副詞化したもの。この動詞に可能の意味が含まれていることは、現代語における「理解し得ない」などの表現からうかがえるところである。実際の用例は「え……ず」というパターンが大半を占めるが、〈できないだろう・できそうにない〉の意となる「え……じ」「え……まじ」などもある。参考までに付け加えておくと、現代の関西方言の「よう言わん」という言い回しは、この構文に由来するという。

【例文】人のそしりをもえははからせ給はず。

人々の非難も気兼ねすることがおできにならない。

『源氏物語』

4 禁止



「な……そ」という構文には、動詞の連用形（カ変・サ変なら未然形）が使われる。これは比較的程度の軽い禁止を表しているため、より命令の度合いを強めたいときは「ゆめ……な」「ゆめゆめ……べからず」などの表現が選ばれる。

【例文】 な起こし奉りそ。幼き人は、寝入り給ひにけり。

『宇治拾遺物語』

お起こし申し上げてはならない。幼い人は寝入ってしまった。

【例文】 ゆめこの雪落とすな。

『大和物語』

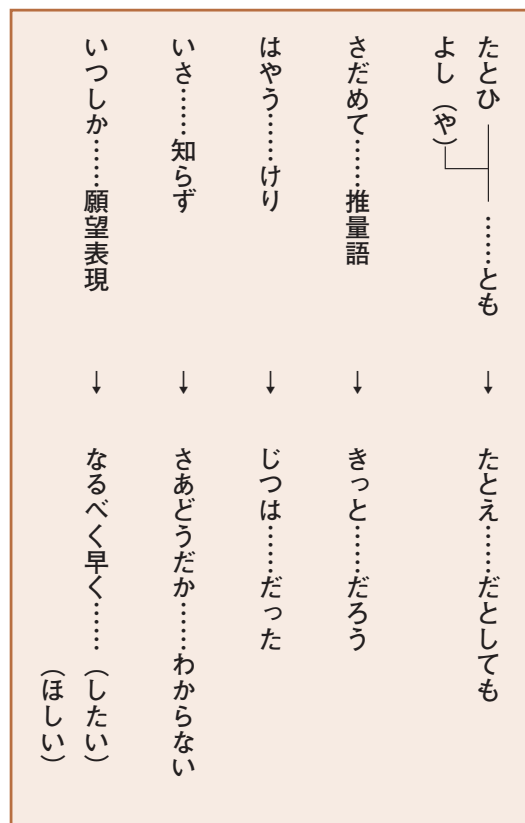
けっしてこの雪を落としてはならない。

【例文】 盗み心をゆめゆめ持つべからず。

『おらが春』

盗み心をけっして持つてはならない。

5 その他



「さだめて」といっしょに使われるのは、推量の意味を含む助動詞。例えば、「べし」「む」「じ」「らむ」など。

「はやう」は「早く」のウ音便形。もともとの語義は〈前から〉であるが、それに「けり」がつくことによって、〈いままで気づかなかつたけれど以前からそうだったのだ〉という意味になる。

「いつしか」は〈いつの間にか・知らないうちに〉の意で使われることが多いが、本来は〈いつの間になつたら……か?〉という意味を表していた。それが〈まだ実現しないのか、早く実現してほしい〉という希望の気持ちの意にすりかわったのである。

疑問・反語／省略・挿入

1 疑問(反語)の基本文型

① 終止形十や。

【例文】「御子はおはすや」と問ひしに、

「お子さんはいらっしゃいますか」と尋ねたところ、

『徒然草』

② 体言・連体形十か。

【例文】「子安の貝取りたるか」と問はせ給ふ。

「子安の貝を取ったか」とお尋ねになる。

『竹取物語』

③ や……連体形。／か……連体形。

【例文】「ほととぎすや聞き給へる」と問ひて、

「ほととぎすの声をお聞きになりましたか」と尋ねて、

『徒然草』

④ 疑問の副詞(十か)……連体形。

疑問の代名詞(十か)……連体形。

【例文】「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、

「どの山が天に近いか」とお尋ねになると、

『竹取物語』

2 反語の訳し方

……だろうか、いや……(はずが)ない。

反語とは、「……か?」と問いかけながら、「いや、そんなはずがない」という答えを言外に含んでいる表現のこと。単純な否定文よりも強い響きを持っている。口語訳にあたっては、通常の疑問文と区別するために、この否定部分を添えた自問自答の形が一般的とされる。

【例文】位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とははいふべき。

『徒然草』

地位が高く、身分が高い人を、すぐれた人というのだろうか、いや、そうではない。

参考

右の例文のように「やは」「かは」という語句が使われているときは、反語表現になっている場合がほとんどである。しかし、これらはまれに疑問を表すこともあるし、「は」を伴わず「や」「か」だけで反語表現になることもよくある。◁やは」「かは」があれば反語と機械的に覚えるのではなく、念のため前後の文章とのつながりを確認する習慣をつけよう。

3 疑問の副詞

いかが (どのように・どうして)
 いかで (どうして)
 いかにか (どのように・どうして)
 いかばかり (どれほど)
 など・なんぞ (どうして・なぜ)
 なでふ (どうして・なぜ)
 など (どうして・なぜ)
 なにゆゑ (どうして・なぜ)
 *なんでふ (どうして)

結びの語は連体形

*反語のみ

これらが連体形と呼応するのは、ちょうど係り結びの法則と同じである。実際、係助詞「か」を伴った「いかでか」「いかばかりか」「なか」という形で使われ、文字どおりの係り結びになることも多い。

【例文】 「**など**いと久しう見えざりつる」と問へば、『枕草子』

「**どうして**随分長い間姿を見せなかつたのか」と尋ねると、

なお、「いかで」には「何とかして……したい」の用法もある。その場合は、願望や意志を表す「ばや」「まほし」「む」などと呼応する。

【例文】 **いかで**このかぐや姫を得てしがな。『竹取物語』

何とかしてこのかぐや姫を手に入れたいものだ。

4 係り結びの結びの語の省略

にや。／にか。↓「ある・あらむ・侍る・侍らむ」が省略されるにこそ。 ↓「あれ・あらめ・侍れ・侍らめ」が省略される
 とぞ。／となむ。↓「言ふ・聞く・思ふ」が省略される

【例文】 まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふ**にや**。『徒然草』

↓文末に置かれるはずの「あらむ」が省略されている
 確かにあったという気がするの、私だけがこのように思う**のだからか**。

【例文】 飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりける**とぞ**。『徒然草』

↓文末に置かれるはずの「言ふ」が省略されている
 飼っていた犬が、暗かったけれど飼主を見知って、飛びついたので**うことだ**。

5 挿入句

疑問の文型をとる句が読点（、）にはさまれていて、結びになるはずの語で文章が終わらない場合は、挿入句であることが多い。

、	……	や	……	む、	――
、	……	や	……	けむ、	――
、	……	や	……	らむ、	――
、	……	か	……	む、	――
、	……	か	……	けむ、	――
、	……	か	……	らむ、	――
、	……	に	……	や、	――
、	……	に	……	か、	――
、	……	疑問語	……	連体形、	――

挿入句とは、文章の途中で割り込んである句のこと。たいていは筆者が自分の感想を補ったものである。いったんこれを外して読めば、文脈を把握しやすくなるだろう。なお、右に示した公式は必ずしも常に当てはまるわけではないし、こういった疑問文型以外のものが文中に挿入されることもある。

【例文】薩摩守忠度は、いづくよりや帰られたりけむ、侍五騎、童一人、
さつまのかみただのり 我が身ともに七騎取つて返し、
わらは 『平家物語』

薩摩守忠度は、どこからお戻りになったのだろうか、侍五騎と童一人に自分を加えて、七騎で引き返し、

※ここからは「Z Study 解答用紙編」の国語「表現技法／重要表現／句形4」2枚目にご記入ください。

二

二

問一 次の(1)～(3)の文の傍線部を口語訳せよ。(各4点)

- (1) をさをさ起き上がりもし給はず、か弱う心苦しげなるは、
『浜松中納言物語』
- (2) つゆその験しるしなかりければ、おぼし嘆かせ給ふ。
『栄花物語』
- (3) ゆめゆめ忘るる事なかれ。
『沙石集』

問二 次の(1)～(4)の傍線部について、あとの(i)(ii)に答えよ。

- (1) なでふ男のいなと思ふ事を、強ひてするやうかはある。
『落窪物語』
- (2) いかばかり心のうち涼しかりけん。
『徒然草』
- (3) うち続き管弦の興ありける、いかにめでたかりけん。
『古今著聞集』
- (4) かくばかり逢ふ日の稀まになる人をいかがつらしと思はざるべき。
『古今和歌集』
- (i) (1)～(4)の傍線部に使われている疑問(反語)の副詞を抜き出して記せ。(各1点)
- (ii) (1)～(4)の傍線部は、A疑問文とB反語文のどちらか。それぞれ記号を記せ。ただし、疑問文と反語文は二つずつある。(各1点)

【二】 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

今は昔、^{*}主計頭小槻当平といふ人ありけり。その子に^{*}算博士なる者あり。名は茂助となんいひける。生きたらば、やんごとなくなりぬべき者なれば、「なくともありなん」と思ふ人もあるに、この人の家、門を強くさして^{*}物忌してゐたるに、^{*}敵の人、隠れて、^{*}陰陽師に死ぬべきわざどもをせさせければ、その^{*}まじわざする陰陽師のいはく、「物忌してゐたるは、慎むべき日にこそあらめ。その日、呪ひ合はせばぞ、^{*}験あるべき。されば、おのれを具してその家におはして呼び出で給へ。門は物忌ならば、⁽¹⁾よも開けじ。ただ声をだに聞きてば、必ず呪ふ験ありなん」と言ひければ、陰陽師を具してそれが家に行きて、門をおびたたしたたきければ、「いとわりなき事なり。世にある人の、⁽²⁾身思はぬやはある。^(a)え入れ奉らじ。^(b)さらに用なり。とく帰り給ひね」と(使用人の口から)言はすれば、また言ふやう、「さらば門をば開け給はずとも、その^{*}遣戸から顔を差し出で給へ。みづから聞こえん」と言へば、⁽³⁾死ぬべき宿世にやありけん、「何事ぞ」とて、遣戸から顔をさし出でたりければ、陰陽師は声を聞き、顔を見つて、すべき限り呪ひつ。それよりやがて頭痛くなりて、⁽⁴⁾三日といふに死にけり。

『宇治拾遺物語』

注 *主計頭 税収支出の会計を担当する役所の長官。

*算博士 大学寮で算術を指導する職。

*物忌 災いを避けるため家にこもること。

*陰陽師 占いやお祓いの専門家。

*まじわざ 呪いの術。

*験 効果。

問一 傍線(1)～(3)をわかりやすく口語訳せよ。

(18点)

問二 傍線(a)・(b)とほぼ同じ意味になるものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号を記せ。(各3点)

- | | | |
|-----|--------------|------------|
| (a) | ア な入れ奉りそ | イ 入れ奉らなむ |
| | ウ 入れ奉らばや | エ 入れ奉るべからず |
| | オ 入れ奉らまほしからず | |
| (b) | ア また用なし | イ いまだ用なし |
| | ウ すべて用なし | エ いたく用あらず |
| | オ いかで用あらず | |

問三 傍線(4)とあるが、それはなぜか。次のA～Cに最適な語を文中から抜き出し、理由を説明する文を完成させよ。(各2点)

A のときに B に C を聞かれてしまったから。

問題

二

二

問一 次の(1)～(3)の文の傍線部を口語訳せよ。

(各4点)

(1) をさをさ起き上がりもし給はず、か弱う心苦しげなるは、

『浜松中納言物語』

(2) つゆその駿しるしなかりければ、おぼし嘆かせ給ふ。

『栄花物語』

(3) ゆめゆめ忘るる事なかれ。

『沙石集』

問二 次の(1)～(4)の傍線部について、あとの(i)(ii)に答えよ。

(1) なでふ男のいなと思ふ事を、強ひてするやうかはある。

『落窪物語』

(2) いかばかり心のうち涼しかりけん。

『徒然草』

(3) うち続き管弦の興ありける、いかにめでたかりけん。

『古今著聞集』

(4) かくばかり逢ふ日の稀まれになる人をいかがつらしと思はざるべき

『古今和歌集』

(i) (1)～(4)の傍線部に使われている疑問(反語)の副詞を抜き出して記せ。(各1点)

(ii) (1)～(4)の傍線部は、ア疑問文とイ反語文のどちらか。それぞれ記号を記せ。ただし、疑問文と反語文は二つずつある。(各1点)

【二】 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

今は昔、^{*}主計頭（かみをつきまじら）小槻当平（おのつきまさひら）といふ人ありけり。その子に^{*}算博士（さんはかせ）なる者あり。名は茂助となんいひける。生きたらば、やんごとなくなりぬべき者なれば、「なくてもありなん」と思ふ人もあるに、この人の家、門を強くさして^{*}物忌（ものいみ）してゐたるに、^{*}敵（かたき）の人、隠れて、^{*}陰陽師（おんぎょうし）に死ぬべきわざどもをせさせければ、その^{*}まじわざする陰陽師のいはく、「物忌してゐたるは、慎むべき日にこそあらめ。その日、呪ひ合はせばぞ、^{*}験（まじ）あるべき。されば、おのれを具してその家におはして呼び出で給へ。門は物忌ならば、⁽¹⁾よも開けじ。ただ声をだに聞きせば、必ず呪ふ験ありなん」と言ひければ、陰陽師を具してそれが家に行きて、門をおびたたくたきければ、「いとわりなき事なり。10世にある人の、⁽²⁾身思（みおも）はぬやはある。^(a)え入れ奉らじ。^(b)さらに不用なり。とく帰り給ひね」と（使用人の口から）言はすれば、また言ふやう、「さらば門をば開け給はずとも、その遣戸（やりど）から顔を差し出で給へ。みづから聞こえん」と言へば、⁽³⁾死ぬべき宿世（すくせ）にやありけん、「何事ぞ」とて、遣戸から顔をさし出でたりければ、陰陽師は声を聞き、顔を見て、すべき限り呪ひつ。それよりやがて頭痛くなりて、⁽⁴⁾三日といふに死にけり。『宇治拾遺物語』

注 *主計頭 税収支出の会計を担当する役所の長官。

*算博士 大学寮で算術を指導する職。

*物忌 災いを避けるため家にこもること。

*陰陽師 占いやお祓いの専門家。

*まじわざ 呪いの術。

*験 効果。

問一 傍線(1)～(3)をわかりやすく口語訳せよ。(18点)

問二 傍線(a)・(b)とほぼ同じ意味になるものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号を記せ。(各3点)

- (a) ア な入れ奉りそ
ウ 入れ奉らばや
オ 入れ奉らまほしからず
イ 入れ奉らなむ
エ 入れ奉るべからず

- (b) ア また用なし
ウ すべて用なし
オ いかで用あらじ
イ いまだ用なし
エ いたく用あらず

問三 傍線(4)とあるが、それはなぜか。次の[A]～[C]に最適な語を文中から抜き出し、理由を説明する文を完成させよ。(各2点)

[A] のときに [B] に [C] を聞かれてしまったから。

【一】

解答

問一

- (1) めったに起き上がることもなさらず
 (2) まったくその効果がなかったの
 (3) けっして忘れてはならない

問二

- (i) (1) なでふ (2) いかばかり (3) いか
 (ii) (4) いかが
 (1) イ (2) ア (3) ア (4) イ

解説

問一 (1) 「をさをさ」は打消語と呼応して、〈ほとんど……ない・めったに……ない〉という意味を表す。ここでは尊敬の補助動詞「給ふ」が使われているので、動詞の部分は「なさらない」と訳す必要がある。下の「か弱う……」に続く形にするのが望ましい。

(2) 「つゆ」は完全否定の構文で使われる副詞。この場合は、形容詞「なし」(の連用形「なかり」と呼応している。「なかり／けれ／ば」は順接確定条件句であり、「なかつたので」と訳される。過去の助動詞「けり」を見落とさないように気をつけよう。なお、「験」は〈効果〉の意である。

(3) 文末の「なかれ」は打消語「なし」の命令形。直訳すれば、「ないうようにしろ」であるが、これは禁止「〓するな」と同じ。その上に「ゆめゆめ」が置かれているので、傍線部は〈けっして……するな〉という強い禁止表現になっているのである。

問二 (1) 「なでふ」は現代語の「どうして」に相当する副詞。疑問文と

反語文の両方に使われる。この場合がどちらであるかという点、後半に「強ひてするやうかはある」とあるので、反語であることがわかるだろう。「やは・かは」が反語を表すというのは必修ポイント。文脈上どうしても疑問でない通じない場合は疑問と解せるが、「やは・かは」はほとんどが反語を表す。

(2) 「いかばかり」は「どれほど・どれくらい」と訳される。すなわちこの文は、心の中のすがすがしさがどの程度だったのかを問うているのである。反語で打ち消しているのではない。

(3) 右の「いかばかり」と同じく「どんなに・どれほど」と訳されるのが「いかに」である。程度や状態を問題にしているのだから、これも反語表現と解すべきではない。文脈からいっても、そのことは明らかである。「興」があつたと書かれている以上、「いや、すばらしかつたはずはない」とは続かないだろう。

(4) 〈会える目が少なくなった人のことをどうしてつらいと思わずにいられようか〉の意で、反語。設問には「疑問文と反語文は二つずつ」とあるので、消去法からも、この(4)は反語であると考えられる。使われている副詞は「いかが」。これは〈どのように〉の意で使われることが多いが、反語文においては「どうして」と訳される。

口語訳

- 問一 (1) めったに起き上がることもなさらず、弱々しく痛々しい様子であるのは、
- (2) まったくその効果がなかったので、嘆き悲しみなさる。
- (3) けっして忘れてはならない。

✓ 語句チェック

験……①前ぶれ。②神仏のご利益・ききめ。③価値。

問二 (1) どうして男が不賛成に思うことを、あえてする理由があるだろうか、いや、ないはずだ。

- (2) どれほど心の中はすっきりしていただろう。
- (3) 引き続いて趣ある管弦の演奏があつたのは、どれほどすばらしかつただろう。
- (4) こんなにも会う日が少なくなった人のことを、どうしてつらいと思わずにいられるだろうか、いや、いられない

✓ 語句チェック

いな……①いや、違う。②いやだ。③いいえ。

めでたし……①すばらしい・立派だ。②祝うべきだ。

111

解答

問一 (1) まさか開けないだろう

(2) 我が身を大切に思わない人がいるだろうか、いや、いい

(3) 死ななければならぬ運命だったのだろうか

問二 (a) エ (b) ウ
問三 A 物忌 B 陰陽師 C 声

解説

問一 (1)「よも……じ」は「まさか……ないだろう」と訳される。よく使われる構文なので、このまま暗記しておこう。

(2)直前の「世にある人の」は同格「の」である。すなわち、この一文は(世の中)にいる人で、しかも……である人は……という形になっているのである。口語訳の際は「身思はぬ」の下に名詞「人」を補うこと。また、その下に反語を表す「やは」が使われていることにも注目しよう。直訳すれば、「我が身を思わない人がいるだろうか、いや、いるはずがない」となる。ただし、これでは少々わかりにくいので、「大切に」という修飾語を加えておくといよ。

(3)「宿世」の下にある「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。また、疑問の係助詞「や」の結びとなる「けん」は過去推量の助動詞。よって「死ぬべき運命だったのだろうか」が正解となる。「死ぬべき」は「死ぬはずの、死ななければならぬ」と言い換えてもよい。ちなみに、この傍線(3)は筆者の推測を文中に織り交ぜたものであり、典型的な挿入句である。

問二 (a)「え……じ」は不可能の構文であり、「できないだろう」と訳

される。選択肢のうち不可能の意味が含まれているのは、エ「べからず」のみ。なお、参考までに他の選択肢も訳しておく、ア「入れ申し上げてはいけない」、イ「入れ申し上げてほしい」、ウ「入れ申し上げたい」、オ「入れ申し上げたたくない」となる。

(b)「不用」は「用なし・用あらず」と言い換えることができる。したがって傍線(b)は、完全否定構文「さらに……打消」の変形と見なせばよい。選択肢の中でこれと同じ意味になるのはウ「すべて……なし」である。ア「また(＝同じく・やはり)」が紛らわしいので注意しよう。

問三 茂助が死んだのは呪いの効果が表れたからである。そこで「験(＝効果)」という語を探してみると、陰陽師の発言の中に二箇所見いだすことができる。

問題文のここを見よ！

- ・その日(＝物忌の日)、呪ひ合はせばぞ、験あるべき(6・7行目)
- ・ただ声をだに聞きてば、必ず呪ふ験ありなん(8・9行目)

どちらも(こうすれば効果があるだろう)という内容になっている。二つの条件を整理すると、

- ・物忌の日(相手が災いを避けようとしている日)に呪うこと。
- ・相手の声を聞いたうえで呪うこと。

となるので、Aには「物忌」を、Bには「陰陽師」を、そしてCには「声」を入れればよいということがわかるだろう。

口語訳

今となつては昔のことだが、主計頭小槻当平という人がいた。その人の子で、算博士である者がいた。名前は茂助といった。生きていたら、高貴な身分となるにちがいない者なので、「いなくなつてくれたらいいのに」と思う人もいたが、(ある日)この茂助の家で、門を固く閉ざして物忌をしていたときに、敵対者が、ひそかに、陰陽師に(命じて、茂助が)死ぬような呪いをかけさせたところ、その呪いの術をしかける陰陽師が言うには、「物忌をしているということは、身を慎まなければならぬ日なのだろう。その日に、合わせて呪うなら、効果があるにちがいない。そこで、私を連れてその家にお出かけになつて(茂助を)呼び出さなすつてください。門は物忌ならば、まさか開けないだろう。ただ(茂助の)声さえ聞いてしまえば、必ず呪いの効果があるだろう」と言つたので、(この人は)陰陽師を連れてその(茂助の)家に行つて、門を激しくたたいたところ、(茂助は)「じつに無茶苦茶なことだ。世の中にいる人で、我が身を大切に思わない人がいるだろうか(いや、いない)。入れ申し上げることはできません。まったく用はない。早くお帰りになつてください」と(使用人の口から)言わせるので、また言うには、「それでは、門をお開けにならなくても、その遣戸から顔を差し出しなすつてください。私から申し上げよう」と言うので、(茂助は)死ななければならぬ運命だったのだろうか、「何事だ」といつて、遣戸から顔を差し出したところ、陰陽師は(その茂助の)声聞き、顔を見て、できる限り(念入りに)呪つた。それからすぐに(茂助は)頭が痛くなつて、三日で死んだ。

語句チェック

- やむ(ん)ごとなし……①重大である。②身分が高い。
 具す……連れて行く。持つて行く。
 おびたし……はなはだしい。
 わりなし……①道理に合わない。②無茶苦茶だ。③耐えられない。
 つらい。④はなはだしい。
 宿世……①前世。②運命。
 やがて……①そのまま。②すぐに。

口語訳って難しい...

辞書・参考書等を使って解きましたか(はい/いいえ) 難しくかった問題 (問一)	添削者からのオーストラリア語用教材 2. 週目重点学習(古文副詞の呼応・疑問・反語など)を見直し、知識事項の再確認をしておきましょう。
添削者より 口語訳では一言一句正確に訳出することが求められますが、なんとなく訳してしまったり、どうしても訳出漏れが起きやすくなります。品詞分解をすると、訳出を忘れる語がなくなりますし、一つひとつの意味を正確にとらえやすくなります。問一を復習するときは、ぜひもう一度品詞分解から取り組んでみてください。	添削者名 三島

二

4/4

(1)

まさか開けないだろう。

☆副詞「よむ」は、多く下に打消推量の助動詞「じ」を伴って、(十中八九そのようなことは起こるまい)という予想を表す。

5/7

自分の身を思わないだろうか、いやそんなことはないだろう。

☆傍線部の前の「世にある人の」「世の中にいる人」を受けて、自分の身を思わない人が「ぬ」の後に「ん」の意を補って訳出する。「や」は反語を表す。

6/7

死ぬべき宿命ではない。

現代語でも「べし」という語は用いるが、「べし」は古文の口語訳の問題なので、「べし」の意味を適切に見分けていることが伝わるように、(……なければならぬ)などと訳そう。
 「にやありけん」の「に」を断定の助動詞「なり」の連用形、「けん」を過去推量の助動詞ととらえ、(だったであろう)などと訳出し、「や」を疑問の係助詞ととらえ(……か)などと訳出する。

3/6

問二

(a)

ア

(b)

フ

(入れ申し上げてはいけない)という禁止の意となり不適切。
 「え……打消語」は不可能を表す構文なので、「え……じ」は(できないだろう)という意。選択肢中(できない)意が含まれるのはエ「入れ奉るべからず」のみ。

4/6

問三

A

返事

B

陰陽師

C

声

☆茂助が死んだのは陰陽師の呪いの効果があらわれたからなので、物忌のときに激しく門をたたき、顔を出させて茂助の声を聞いて陰陽師が念入りに呪っていることをとらえる。